博士論文概要

論文題目

# 近現代「沖縄」文学研究――ジェンダー・暴力批判・戦争記憶継承

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程
クリヤマ　ユウスケ
栗山　雄佑

## 1. 目次



## 2. 全体の要旨

3 部 9 章で構成される本博士論文は、近現代に発表された沖縄の文学の蓄積の中から、とりわけ沖縄県の歴史のターニングポイントとしての 1995 年 9 月に発生した米軍兵士による少女暴行事件とその後

の反基地運動に反応した作家、作品を論じることを主眼とする。これらから、各作品に描かれた作品空間内にて行使される暴力への抵抗の様相を確認するとともに、行使されようとする対抗暴力の受容、作中にて見過ごされてきた〈声〉や存在から新たな他者理解の方策を考える。

第1部では、目取真俊が1999年に発表した掌編小説「希望」に内包された問題について論じる。「希望」は、1995年9月の事件について当時想起されなかった「最低の方法」として、米軍兵士の子どもを略取し絞殺する、といった想起を行った創作として発表された。それは、沖縄の状況に積極的に問題提起を行っている目取真の作家イメージを定着させたものでありつつ、いわゆる基地問題に代表される〈沖縄の怒り〉なる言説を下支えするものとしても認識されている。しかし、作品はまた少女に対する性暴力が提起した性暴力の問題を離れ、基地問題等の沖縄と対日本政府、対米軍基地の問題へと論点をスライドさせてしまうものでもある。この「希望」に内包する問題を基軸に、第1部では対抗暴力に対置される「非暴力」の観点から行われる抵抗について、「希望」と同様の問題を取り上げた「虹の鳥」、「希望」と同様に沖縄における天皇制問題、皇族へのテロルへと問題が焦点化している「平和通りと名付けられた街を歩いて」を取り上げる。

第2部では、目取真と1995年9月の問題を考える上で、1995年に至るまでに沖縄においていかなる暴力が潜在していたのかを考える必要がある。そのとき援用したいのが、1970年代に米軍統治下から本土復帰後に至る沖縄の状況を踏まえた作品を発表していた又吉栄喜の作品群である。「ギンネム屋敷」は、戦時中に沖縄に連行された朝鮮人軍夫、慰安婦が戦後にいかに存在を抹消されていったのか、を踏まえた作品であり、かつ沖縄戦の記録の聞き取りや裴奉奇の名乗り出といった暴力の記憶の浮上をも念頭に入れた作品である。また、「ジョージが射殺した猪」は、ベトナム戦争時のコザ市の基地街を舞台に米軍にも沖縄にも馴染めない一人の米軍兵士を想起しつつ、「暴力性を持つ兵士」といったジョージを含む米軍兵士に対する眼差しに内在する暴力性を浮き彫りにすると同時に、米軍兵士と沖縄の民衆の間にある「敵―味方」に代表される二分法の存在を描出したものである。この又吉の両作品が提起した、理解しえない他者の背景を「声」を手掛かりに探っていく、といった手法が浮上させたものを基軸に、沖縄戦から「50年余」に突然右足が水で膨れ上がり、その水を夜な夜な兵士の亡霊が飲みに来る、といった内容を持つ目取真の「水滴」を読みかえていく。

第3部で扱うのは、ここまでに論じてきた問題を踏まえ、戦時から現代に至る様々な暴力の記憶と出会った者がいかなる変容を遂げ、沖縄という空間を生きることができるのか、を提起する作品である。例えば、目取真の「群蝶の木」は、従軍慰安婦であったゴゼイと帰郷した際に再び出会った義明の再会を基に、義明がゴゼイとの「接触」によって彼女について「わからない」ことを認めた上で、自らに生じた「何か」を基に見過ごしてきたものを見つめ直す契機が生まれたことが描かれている。もしくは、崎山多美の「月や、あらん」においては、元従軍慰安婦の朝鮮人女性から編集者の高見沢了子、失踪した高見沢の声が記録されたカセットテープを聴く「わたし」へと伝達される理解不能な「ノイズ」が、沖縄戦の記録から漏れ落ちた記憶を表す「ノイズ」化した証言を語る声の伝達の可能性を提起すると同時に、その「ノイズ」を聞き、自己の変容を遂げていく過程を再び「声」として伝達していく過程に新たな戦時記憶の可能性が描かれている。この2つの聞き手の「変容」を基に近現代「沖縄」文学が描出してきた戦時性暴力の記憶の伝達を継続する方策の可能性を探る。その上で、現時点でこれまでの目取真の集大成として発表された「眼の奥の森」について、「希望」から連続する対抗暴力の問題が継承されたことを論じるとともに、作中で現代の中学生の少女がいかにして戦時性暴力を受けた女性に刻まれ

た傷を自己の境遇と重ねつつ、「昇華」しようとしたのかを考える。

以上を通じて、沖縄の文学、とりわけ目取真俊の文学を論じる上で常套句のように使われる〈沖縄の怒り〉なる言説の問題点とともに、見過ごされてきた登場人物の〈声〉を感知し聞き受けるための方策を提起する。

## 3. 目的

本稿の主旨は、近現代に発表された沖縄の文学の蓄積の中から、沖縄県の歴史のターニングポイントとして位置付けられる、1995 年 9 月に発生した米軍兵士による少女暴行事件とその後の反基地運動に反応した、目取真俊の作品を論じることを主眼とするものである。それは、各作品に描かれた暴力の様相を確認するとともに、ここで行使されようとする対抗暴力がもたらすものを批判するものでもある。その上で、作中にて見逃されてきた〈声〉や存在を掬い上げつつ、それを感知できない限界を踏まえた他者理解の理策の方策を考えるものである。そのために、目取真のみならず同時期に意欲的に作品を発表していた又吉栄喜、崎山多美の作品を援用し、ジェンダー、対抗暴力、記憶継承の 3 つの観点、全体を覆う他者理解の観点を用いつつ次に挙げる部立てから読み直していく。

## 4. 各章要約

### 序章 今、「沖縄」文学を読むということ

序章では、表題に使用した「沖縄」の文学という概念の説明、および本博士論文が扱った「1995 年 9 月」という区切りと近現代「沖縄」文学の関係について概説した。

近現代日本文学研究において、もしくは近現代日本文学史において、「沖縄文学」というジャンルは、アイヌ文学、在日文学、女性（女流）文学といった区分と同様に一種の〈サブジャンル〉として取り扱われてきた。さらには、沖縄の文学を論じる際に使われる「沖縄ならでは」といった称賛に内包された〈周縁化〉に対し、論者は疑念を抱いてきた。この状況に加え、本土作家による沖縄描写、海外の作家、研究者による沖縄の文学の受容を踏まえ、本博論では〈「沖縄」文学〉、もしくは〈沖縄の文学〉といった表記を行ったことを示した。

このような観点を踏まえつつ。本博士論文で取り上げた作家が、目取真俊、又吉栄喜、崎山多美のであることの意味を示した。大城立裕を始めとした幾多の作家の中からこの 3 者を取り上げた理由について、1995 年 9 月 4 日に発生した 3 人の米軍兵士による少女暴行事件と、それが引き起こした本土の「戦後 50 年」と沖縄の「戦後ゼロ年」の状況、反基地運動の盛り上がりと鎮静化の中から生まれた諸問題について、特に鋭敏に反応したのが目取真であり崎山であり、あるいは大局的な状況に与しながらも 1995 年以前に鋭い問題意識に基づいた作品を発表していた又吉であることを示した。

### 第 1 章　目取真俊「希望」論――動員される「少女」「白人男児」

第 1 章では、「希望」が執筆された背景、先行研究においていかなる点が評価され、もしくは批判されてきたのかを整理した上で、作品において意図的、もしくは無意識に書き漏らされてきた主人公による「米軍兵士に暴行された少女への言及」から分析を開始した。事件当時の女性の人権問題として問題

提起を行おうとした高里鈴代と、反基地運動の観点から活動しようとした男性の衝突から、事件から 20 年経過した 2015 年に『越境広場』誌上において交わされた発言までには、事件に対する「男性」と「女性」の認識の差異が見られる。この差異を確認しつつ、ジェンダー差異を問わず欠落してきた事件を「自己に連なる問題として考える」といった視点が作中の主人公にも欠けていたことについて指摘を行った。この欠落がありながらも進行していく主人公の対抗暴力、一方的とも言える米軍、政府、沖縄県民への痛罵について、少女が受けた暴力を解釈可能と勝手に判断し自己の欲望を充足させるために利用する行為であり、それが目取真の思惑を外れ多くの読者によって「最低の方法」でありながらも「希望」として消費されてしまったことを明らかにした。その上で、作品最終部においてガソリンを被り自らの身体に火を放つという選択を取った主人公に対し、駆け寄った中学生グループが煙を上げる主人公を蹴り上げる、といった行為の意味について、自らの存在を抹消する行為として受容した主人公の認識をそのまま受け取るのではなく、発火した人間を救助しようとする行為ではなかったか、との考えを提起した。

**第 2 章　誰がために怒りを表明するのか――目取真俊『虹の鳥』論**

第 2 章では、2004 年に発表された「虹の鳥」より、主人公カツヤに内在する少女暴行事件や自身の停滞する現状に対する「怒り」の存在を確認しつつ、その怒りを一人の少女、マユに刻まれていく傷跡を介して表現しようとすることについて、作中のカツヤら男性の言動、あるいは実際に見られた女性や沖縄県民の犠牲を介した自己の主張の発露の企図について、批判を行った。さらには、マユが行う報復行為が、その実においてこれまで比嘉やカツヤ、かつての中学生の同級生の少女らから加えられた暴力の模倣でしかないことについて、抵抗を実現する言動の術さえもが加害者によって奪取されていたこと、もしくはその加害者さえも暴力によってでしか自己の「怒り」を発露できなくなっていることを明らかにした。この状況について、作中人物を結びつける「怒り」と「身体の傷つきやすさ」といった点を、作中人物がいかに共有できるのか、この問題について作中で幾度も行われる「話し合い」、その中での発言にあった「声の震え」に着目した。これより、主人公の独白によって彩られ対話の機会を一切遮断した「希望」とは異なり、「虹の鳥」は暴力の往還のなかで自己の内奥に潜在する少女暴行事件を筆頭とした沖縄を取り巻く現実への「怒り」を、その中で見えてくる「自己の弱さ」を、他者と共有するための「話し合い」の可能性を提起する作品であることを明らかにした。

**第 3 章　「テロ」・「皇族」・「沖縄」――目取真俊「平和通りと名付けられた街を歩いて」論**

第 3 章では、1986 年に発表された「平和通りと名付けられた街を歩いて」について、先行研究にて見逃されてきた「事大主義」と評された那覇市民の言動の裏にある見えない天皇制の圧力の存在に着目した。作品について、先行研究ではカジュ、フミが表明する皇族の夫妻、警備に当たる沖縄県警や本土から派遣された警察官、夫妻を「無批判」に歓迎する那覇市民への批判に同調し、ウタが行った行為を称揚している。しかし、前述の訪沖を歓迎する男性、沖縄県警の警官、カジュにつきまとう警官の姿を認めつつ「気のせい」とする教師、そして正安に着目すれば、彼らが決して皇族の夫妻を歓迎しているのではなく、「要請」や「協力」を強いられていることが明らかになる。ここに、見えない皇族の訪沖に伴う〈圧力〉の存在を見出し、かつそれを「思い過ごし」と考え、皇族を批判すること、危害を加え批判されることを「恥」と考えさせる天皇制のシステムについて指摘を行った。これらを踏まえ、正安や

カジュがウタの成し遂げた行為によって事件後も様々な嫌がらせを受ける可能性を想起し、一見反天皇制の観点からは評価された作品が、その実において見えない天皇制に基づく圧力の存在と超克の困難さを如実に描出してきたことを指摘した。

**第 4 章　補填された欲望・裂け目からの〈叫び〉――又吉栄喜「ギンネム屋敷」論**

第 4 章では、1980 年に発表された又吉栄喜「ギンネム屋敷」を基に、沖縄の男性 3 人が抱く金銭的欲望、それに巻き込まれる朝鮮人のエンジニアが「私」に遺した財産といった金銭が、各人の語り得ぬものを代弁する手段として機能し、かつそれが幾重にもヨシコーや小莉の声を奪い去る手段として作中に登場することを指摘した。この金銭の譲渡に委ねられた男性の欲望の発露を指摘すると同時に、登場する男性が他者に金銭を譲渡することでしか語り得ないものの存在も明らかにした。これらの点から、先行研究においても「亡霊」などとしか言いようがないものが跋扈する作品において、「わけのわからん」ものとしての戦時記憶を「戦時性暴力」や「沖縄戦体験」と言い切りカテゴライズすることの問題とともに、作中の男性が陥った金銭等を用いた暴力的な記憶の上書きから漏れ聞こえる記憶を語る声への回路への端緒を提示した。

**第 5 章　眼前のフェンスを〈撹乱〉するために――又吉栄喜「ジョージが射殺した猪」論**

第 5 章では、又吉が「ギンネム屋敷」の 2 年前の 1978 年に発表した「ジョージが射殺した猪」を基に、又吉が想起した米軍兵士ジョージに仮託された「巨大なかたまり」の存在、先行研究にてマイク・モラスキーが提示した米軍兵士に対する「ステロタイプ」の存在、同じく先行研究にて喜納育江が指摘した又吉によるジョージへの「不法侵入」との指摘を基に、ジョージに迫られている「規範」とは何かを考えた。そのとき、ジョージらが沖縄県民を「猿」などと罵倒すると同時に沖縄の民衆もジョージら米軍兵士を自身にとっての「敵」として眼差すといった「ステロタイプ」の衝突が発生していたこと、同時に「米軍兵士」との情報しか得られていない読者さえもジョージを「白人」で「小柄で貧弱」な「ヘテロセクシュアル」であろうジョージの人物像を曖昧に措定しながら作品を読み進めていくしかない、といった読者を巻き込んだ「ステロタイプ」の衝突が発生していることを指摘した。次に、沖縄の女性を「レイプすべき」などと罵倒しつつも、ホステスとの性交を通じて「身近に感じ」たいといった願望を見せるジョージの内面にある「弱さ」に対する「不法侵入」の可能性を考えた。作品で、ジョージに求められている「ジェンダー〈規範〉」への馴致とそれがもたらしたジョージの苦悩と自壊を指摘するとともに、それが米軍兵士による沖縄の女性への性暴力の存在を知りながらも、ジョージらに「性交」を介した経済活動をせざるを得ない沖縄の民衆の苦悩との接点をもたらす可能性を提起した。

**第 6 章　語られぬ記憶を〈放出〉するために――目取真俊「水滴」を読み替える**

第 6 章では、1997 年に芥川賞を獲得した目取真の「水滴」を基に、数多く発表されている先行研究を整理した上で、主人公の徳正、その妻のウシが語り得ない沖縄戦経験とは何か、といった点から考察を開始した。作品における沖縄戦の記憶と女性への被害の排除については、村上陽子、スーザン・ブーテレイによって指摘が行われているが、両者の指摘を基にウシが徳正の足を叩くことで開示されていく彼の内奥にある語り得ないものについて、それが地域社会によって規制されていた「加害性」、沖縄戦時から戦後に至る強制連行された東アジアの人々、戦時性暴力に晒された人物の存在の記憶の「語りえな

さ」に繋がるものではないか、と仮定した。その上で、寝室から逃げ出すことも、水を分け与えても「癒やし」が訪れることがない徳正の姿から、戦時の壕の「亡霊に取り憑かれることへの恐怖」の内実について、それが前述のように水を求める兵士の後方に存在していたかもしれない民間人、将校が連れていた従軍慰安婦、さらには摩文仁への敗走中に目の当たりにした人々の光景に立ち返ることではないか、と指摘した。この点から、戦後の沖縄における沖縄戦の語りの変化とともに徳正が目の当たりにした体験、記憶が語る機会が持たれようとしながらも、これまで「男の言葉」に囚われている徳正が語り得なかったことを明らかにした。

**第 7 章　相互理解への回路という欲望――目取真俊「群蝶の木」論**

第 7 章では、2000 年に発表された目取真の「群蝶の木」を基に、元従軍慰安婦のゴゼイと老いたゴゼイに再会した義明に記憶の伝達があったと規定した上で論を進めた先行論者について、彼らが捨象した言語化することが困難な他者との身体接触、もしくは過去の記憶の伝聞がもたらす感覚に着目した。作中にて表明される義明の〈わからなさ〉が何に起因し、かつ何をもたらそうとするのかを思索することで、理解し得ない他者の記憶への回路の端緒が生まれることを明らかにした。この義明とゴゼイの関係について、1975 年に従軍慰安婦であったと名乗り出たペ・ポンギの存在から、ゴゼイの存在が「自然」なものとなっている空間の問題、その中でゴゼイに「何か」を看取し自己の感覚からその違和感を読み解こうとする義明の試みに、過去の戦時性暴力の記憶を現在の地平から読み解く、といった試みのなかで、記録や「正式」な証言から漏れ落ちた声や存在を拾い上げることの意味、もしくは戦時性暴力を自らの身体感覚の変化から読み取ろうとすることが果たす新たな歴史認識の可能性を描いた作品として「群蝶の木」を位置付けた。

**第 8 章　〈ノイズ〉混じりの証言を聞き受けること――崎山多美『月や、あらん』論**

第 8 章では、崎山多美が 2012 年に書き下ろした「月や、あらん」を、朴裕河が試みた多様な戦時の性の光景の収集の試みとしての『帝国の慰安婦』とそれを巡る賛否を援用しつつ、当時の状況をすべて知りえない現代の地平において戦時性暴力の証言を聞くことはいかにして可能か、といった問題に対する「ノイズ」への着目への必要性を指摘した。その上で、登場人物の高見沢了子や「わたし」が果たしていく「ノイズ」による身体変化について、それが従前の認識のみでは解釈することができないものを聞き受けるために必要とされているものとして位置づけ、その変化の過程で行われる「翻訳」の作業をも「ノイズ」として再び新たな聞き手に送り届けることで、さらなる記憶、証言の解釈の可能性を押し拡げようとしていることを指摘した。さらに、「わたし」が様々なマイノリティの「マブイのざわめき」を聞き取ることが出来る身体を獲得する過程が描かれることで、作品さえも「戦時性暴力」を描いた作品から沖縄内に潜在する様々な暴力的な事象にまつわる者の声を浮上させるテクストへと「変化」していく。このように、様々な声や「ノイズ」の混交の中で、一方的な読解によらない多様な声や記憶の伝達を葉たる身体の変化の意味が示された作品として、「月や、あらん」が位置づけられることを明らかにした。

**第 9 章　暴力の記憶を「語る」ために――目取真俊『眼の奥の森』論**

第 9 章では、2009 年に刊行された目取真の「眼の奥の森」を基に、作中の核となる小夜子という女性

への米軍兵士による性暴力、それへの報復を行った盛治の存在を起点に、盛治の呼びかけに小夜子が「応答」することで、一つの希望が示されている、といった観点への疑念を提起した。「希望」や「虹の鳥」論で指摘したように、盛治が行った報復行為は、小夜子が被った傷の痛みを安易に代弁するばかりか、「薄馬鹿」と自身を卑下した者たちを見返すために利用するものでしかない。この盛治の行為が作中において正当な小夜子への応答として機能することについて、盛治の行為が作中に跋扈する様々な暴力的事象への応答の困難さを容易に解決してしまう手段として機能していることを指摘した。その上で、作中にて盛治の存在に触れていない 2 人の女性に着目した。小夜子の妹のタミコは、小夜子が漏らした声を聞き取った際に、「盛治」ではなく「セイジ」と解釈する。また、中学校での講演の際にも小夜子の事件は話しつつも、事件後に盛治が「報復」を行ったことは一切話すことはないし、その後も盛治について回想することはない。ここに、タミコが小夜子の被った傷に自身が迫りきれないという限界を認識した上で、いかにして自身の問題として語ることが出来るのか、といった問題意識を持っていることを明らかにした。その実践としての沖縄戦講演を聞いた少女も、タミコから聞いた小夜子の存在を現在苛烈ないじめを受けている自身の状況と重ね合わせる。その上で、少女は帰宅時にアパートの屋上から飛び降りようとする女性の幻影を見、助けようと階段を駆け上がっていく。この少女の行為を基に、苛烈ないじめを受けている少女が自身に暴力を呼び込むメカニズムを看取した上で、その暴力を停止するために「屍体」ではなく自ら「声」を発する存在として「生きなければならない」と考えていることを明らかにした。

## 5. まとめ

本論では、1995 年 9 月に発生した少女暴行事件をめぐる目取真俊の各作品について、又吉栄喜、崎山多美の作品を援用しながら論じた。その中で、「希望」にて提起された対抗暴力の想起への疑義を基に、各作品に潜在していた安易な対抗暴力による異議申し立てに頼ることがない「非暴力」的な抵抗の可能性の追求、あるいは作中や実際の沖縄において後景化されてきた者たちの〈声〉を想起の方策を提起した。この観点から、目取真の作品に付随する、実際の目取真の言説を基にした作品読解に依拠することがない読解、さらには戦時性暴力問題をめぐる論争の成果を援用することによって、これまでの近現代「沖縄」文学に付帯する「被害者」言説によって埋もれてしまう幾重にも重なる暴力の狭間にある「声」を聞き取る術を提起した。

## 6. 主な引用・参考文献

（序章）

・新潮社辞典編集部（編）『増補改訂　新潮日本文学辞典』新潮社　1988 年 1 月
・『芥川賞全集』第 7 巻　文藝春秋社　1982 年 8 月
・『芥川賞全集』第 9 巻　文藝春秋社　1982 年 10 月
・『芥川賞全集』18 巻　文藝春秋　2002 年 10 月

・「目取真俊さん　芥川賞に決まる」『朝日新聞』1997 年 7 月 18 日
・鳥居達也「沖縄の 40 年　表現者たち一　作家はオキナワを離れた」『朝日新聞』2012 年 2 月 13 日
・ 岡本恵徳「沖縄の小説の現在――内面化への志向」『敍説ＸＶ』花書院　1997 年 8 月
・大城立裕／日野啓三／池澤夏樹／又吉栄喜／小浜清志／湯川豊（総合司会：山里勝己　司会：岡本恵徳／黒澤亜里子）「［ワークショップ］沖縄で書くこと―何をどう書くか―」『沖縄文学フォーラム　沖縄文学フォーラム・土着から普遍へ―多文化主義時代の表現の可能性―』沖縄文学フォーラム実行委員会　1997 年 3 月
・花田俊典「〈オキナワ〉私記」『沖縄はゴジラか―〈反〉・オリエンタリズム／南島／ヤポネシア―』花書院　2006 年 5 月
・目取真俊「〈癒やしの島〉幻想とナショナリズム」『沖縄「戦後」ゼロ年』日本放送出版協会　2005 年 7 月
・『〈コンパッション〉は可能か？』対話集会実行委員会（編）『〈コンパッション（共感共苦)〉は可能か？―歴史認識と教科書問題を考える』影書房　2002 年 11 月
・目取真俊・仲里効・西谷修・真島一郎（司会：中山智香子）「暴力とその表出」西谷修・仲里効（編）『沖縄／暴力論』未來社　2008 年 8 月
・鹿野政直「沖縄をめぐる／に発する「文化」の状況」新崎盛暉・比嘉政夫・家中茂（編）『地域の自立　シマの力（下）　沖縄から何を見るか　沖縄に何を見るか』コモンズ　2006 年 10 月
・新城郁夫「撹乱する島――ジェンダー的視点（シリーズ第三巻)」屋嘉比収／近藤健一郎／新城郁夫／藤澤健一／鳥山淳（編）『沖縄・問いを立てる-一　沖縄に向き合う――まなざしと方法』社会評論社　2008 年 7 月
・目取真俊・池澤夏樹「「絶望」から始める。」『文藝春秋』1997 年 9 月号

（第 1 章）

・目取真俊「希望」『目取真俊短編小説選集 3　面影と連れて』影書房　2013 年 11 月
・目取真俊「沖縄の文化状況の現在について」『けーし風』第 13 号　新沖縄フォーラム刊行会議　1996 年 12 月
・目取真俊「いま語る　沖縄と私　「最悪の選択」を考える　編み出したい独自の文章」『琉球新報』　1999 年 8 月 30 日
・「米軍普天間飛行場移設　稲嶺沖縄県知事の会見〈要旨〉」『朝日新聞』1999 年 11 月 23 日
・徐京植「『希望』について」『ユリイカ』第 33 巻 9 号　青土社　2001 年 8 月 1 日
・大野隆之「目取真俊「希望」」『沖縄文学論――大城立裕を読み直す』編集工房東洋企画　2016 年 3 月
・目取真俊・仲里効・西谷修・真島一郎（司会：中山智香子）「暴力とその表出」西谷修・仲里効（編）『沖縄／暴力論』未來社　2008 年 8 月
・金城正樹「暴力と歓喜―フランツ・ファノンの叙述と目取真俊「虹の鳥」から」冨山一郎／森宣雄『現代沖縄の歴史経験　希望、あるいは未決性について』青弓社　2010 年 7 月
・鄭柚鎮「「安保の問題を女の問題として矮小化するな」という主張をめぐるある政治―感情問題をめぐる政治の葛藤、あるいは葛藤という政治」　冨山一郎／森宣雄『現代沖縄の歴史経験　希望、あるい

は未決性について』青弓社　2010 年 7 月
・新城郁夫「塞がれた口／目取真俊「希望」からの想起」『沖縄文学という企て 葛藤する言語・身体・記憶』インパクト出版会　2003 年 10 月
・新城郁夫「沖縄の政治的主体化と対抗暴力「沖縄イニシアティブ」と『希望』」『沖縄を聞く』　みすず書房　2010 年 12 月
・謝花直美「米兵による暴行事件　人権侵害で男女に〝温度差〟」『沖縄タイムス』一九九六年二月七日
・田仲康博・前嵩西一馬・親川裕子・玉城江梨子（司会：仲里効）「〈1995・沖縄〉―何がはじまり、何が変わったのか」『越境広場』一号　越境広場刊行委員会　2015 年 12 月
・目取真俊『沖縄「戦後」ゼロ年』日本放送出版協会　2005 年 7 月
・「高校生代表あいさつ」『琉球新報』1995 年 10 月 22 日　朝刊 26 面
・勝方＝稲福恵子『おきなわ女性学事始』新宿書房　2006 年 12 月
・神谷三島「少女はどこへ行くのか～重層する暴力の下で～」『ＥＤＧＥ』創刊号　ＡＰＯ　1996 年 2 月
・上野千鶴子「女性革命戦士という問題系」『現代思想』2004 年 6 月号　青土社　2004 年 6 月 1 日
・村上陽子「身体を生きることの痛みに向けて――目取真俊「面影と連れて」論」坪井秀人（編）『戦後日本を読みかえる　第 5 巻　東アジアの中の戦後日本』　臨川書店　2018 年 7 月

（第 2 章）

・目取真俊「虹の鳥」『虹の鳥』影書房　2006 年 6 月
・佐藤泉「1995 - 2004 の地層　目取真俊「虹の鳥」論」　新城郁夫（編）『沖縄・問いを立てる-3　撹乱する島―ジェンダー的視点』社会評論社　2008 年 9 月
・与那覇恵子「目取真俊『虹の鳥』」『文芸的書評集』めるくまーる　2016 年 4 月
・中村隆之「絶対的暴力の牢獄」『図書新聞』第 3335 号　2018 年 1 月 20 日
・谷口基「不可視の暴力を撃つために―目取真俊「虹の鳥」論―」『立教大学日本文学』第 97 号　立教大学日本文学会　2006 年 12 月
・銘苅純一「目取真俊「虹の鳥」の異同」『人間生活文化研究』22 号　大妻女子大学人間生活文化研究所　2012 年
・尾西康充「「虹の鳥」―《依存》と《隷属》の社会―」『沖縄　記憶と告発の文学　目取真俊の描く支配と文学』大月書店　2019 年 11 月
・仲里効「マーからワジーが」黒澤亜里子（編）『沖国大がアメリカに占領された日」8・13 米軍ヘリ墜落事件から見えてきた沖縄／日本の縮図』青土社　2005 年 5 月
・ハンナ・アーレント　高野フミ（訳）「暴力について」『暴力について』みすず書房　1973 年 3 月
・村上陽子「身体を生きることの痛みに向けて――目取真俊「面影と連れて」論」坪井秀人（編）『戦後日本を読みかえる　第 5 巻　東アジアの中の戦後日本』　臨川書店　2018 年 7 月
・花村萬月『沖縄を撃つ！』集英社　2007 年 11 月
・谷川茂「書評『沖縄を撃つ！』」『週刊金曜日』685 号　金曜日　2008 年 1 月 11 日

・新城郁夫「はじめに…撹乱する島　ジェンダー的視点」新城郁夫（編）『沖縄・問いを立てる-3　撹乱する島　ジェンダー的視点』社会評論社　2008 年 9 月
・崎山多美・黒澤亜里子・喜納育江・岡本由希子「沖縄――ディストピアの文学」『すばる』2007 年 2 月号　集英社　2007 年 2 月 1 日
・目取真俊・仲里効・西谷修・真島一郎（司会：中山智香子）「第二シンポジウム　暴力とその表出」西谷修・仲里効（編）『沖縄／暴力論』未來社　2008 年 8 月
・尾崎文太「目取真俊『虹の鳥』考 フランツ・ファノンの暴力論を越えて」『言語社会』第 5 号　一橋大学大学院言語社会研究科　2011 年 3 月
・ジュディス・バトラー　清水晶子（訳）「生存可能性、被傷性、情動」『戦争の枠組　生はいつ嘆きうるものであるのか』筑摩書房　2012 年 3 月
・ヴァルター・ベンヤミン「暴力批判論」1921 年 8 月。本論は、野村修（訳）『ヴァルター・ベンヤミン著作集Ⅰ　暴力批判論』　晶文社　1969 年 5 月　に拠った。
・ジュディス・バトラー　ジル・ストウファー　西亮太（訳）「平和とは戦争への恐ろしいまでの満足感に対する抵抗である」『現代思想』2006 年 10 月臨時増刊号　青土社　2006 年 10 月

（第 3 章）

・目取真俊「平和通りと名付けられた街を歩いて」『目取真俊短編小説選集 1 魚群記』影書房　2013 年 3 月
・「社説　天皇と沖縄　「心痛む」歴史への思い」『朝日新聞』2018 年 3 月 30 日　朝刊 16 面
・「〈社説〉両陛下来県　平和願う姿勢の継承を」『琉球新報』2018 年 3 月 28 日　朝刊 8 面
・Davinder L. Bhowmik “Postreversion fiction and Medoruma Shun” *Writing Okinawa -Narrative acts of identity and resistance* Routledge , US 2008
・友田義行「目取真俊の不敬表現―血液を献げることへの抗い」『立命館言語文化研究』22 巻 4 号　立命館大学国際言語文化研究所 2011 年 3 月
・「2 日間の日程終え皇太子ご夫妻帰京」『沖縄タイムス』1983 年 7 月 14 日　朝刊 13 面
・「皇太子来沖の余波　交通規制と過剰な警備　県民生活にも影響」『沖縄タイムス』1983 年 7 月 15 日　朝刊 14 面
・「沖縄ご訪問、緊張の準備作業」『朝日新聞』1987 年 8 月 6 日　朝刊 2 面
・鈴木智之「雛の一撃―初期短編小説作品における〈弱さ〉の反転」『眼の奥に突き立てられた言葉の銛　目取真俊の〈文学〉と沖縄戦の記憶』　晶文社　2013 年 3 月
・佐々淳行『菊の御紋章と火炎ビン』文藝春秋社　2009 年 4 月
・西成彦「老移民と皇太子――愛国心と「恥」について」『胸さわぎの鷗外』人文書院　2013 年 12 月
・岡本恵徳「庶民の眼で捉えた天皇制」『現代文学にみる沖縄の自画像』高文研　1996 年 6 月
・池田和・岡本恵徳・川満信一・与那国暹「沖縄にとって天皇制とは何か」沖縄タイムス社（編・発行）『沖縄にとって天皇制とは何か』1976 年 6 月
・目取真俊「あとがき」『平和通りと名付けられた街を歩いて　目取真俊初期短篇集』影書房　2003 年 10 月

・「天皇・皇后両陛下、公式の記者会見」『朝日新聞』1975 年 11 月 1 日　朝刊 1 面

（第 4 章）

・又吉栄喜「ギンネム屋敷」『ギンネム屋敷』　集英社　1981 年 1 月
・又吉栄喜「消えたギンネム」『時空超えた沖縄』燦葉出版社　2015 年 2 月
・安仁屋政昭「総論」沖縄県（編・発行）『沖縄県史　第 10 巻各論編 9　沖縄戦記録 2』1975 年 3 月
・呉世宗『沖縄と朝鮮のはざまで　朝鮮人の〈可視化／不可視化〉をめぐる歴史と語り』明石書店 2019 年 1 月
・新城郁夫「〈レイプ〉からの問い　戦後沖縄文学のなかの戦争を読む」『沖縄文学という企て　葛藤する言語・身体・記憶』　インパクト出版会　2003 年 10 月
・新城郁夫「奪われた声の行方　「従軍慰安婦」から 70 年代沖縄文学を読み返す」『到来する沖縄　沖縄表象批判論』インパクト出版会　2007 年 11 月
・新城郁夫「文学のレイプ　戦後沖縄文学における「従軍慰安婦」表象」『到来する沖縄　沖縄表象批判論』インパクト出版会　2007 年 11 月
・村上陽子「亡霊は誰にたたるか―又吉栄喜「ギンネム屋敷」」『出来事の残響―原爆文学と沖縄文学』インパクト出版会　2015 年 7 月
・仲井眞建一「又吉栄喜「ギンネム屋敷」論――「悲鳴」としての「握りこぶし」――」『立教大学日本文学』114 号　立教大学日本文学会　2015 年 7 月
・丸川哲史『冷戦文化論　増補改訂版』双風社　2020 年 7 月
・又吉栄喜・山里勝己「「沖縄」を描く、「沖縄」で描く―『豚の報い』をめぐって―」『けーし風』13 号　新沖縄フォーラム刊行会議　1996 年 12 月
・財団法人女性のためのアジア平和国民基金（編・発行）『「慰安婦」問題とアジア女性基金』2004 年 1 月
・西野瑠美子「「慰安婦」被害者の「尊厳の回復」とは何か？　――女性国際戦犯法廷が求めた正義と「国民基金」」金富子・中野敏男（編）『歴史と責任　「慰安婦」問題と 1990 年代』青弓社　2008 年 6 月
・洪玧伸『沖縄戦場の記憶と「慰安所」』インパクト出版会　2016 年 2 月
・本郷富士弥・川島由次・城間定夫・深沢利行「ミモシンの分離精製とマウスに対する生理活性」『日本畜産学会報』第五四巻第四号 日本畜産学会　1983 年 4 月
・由井晶子「序章　廃墟の中から立ち上がって―戦後女性の原点を見る―」那覇市総務部女性室（編）『なは・女のあしあと　那覇女性史（戦後編）』琉球新報社事業局出版部　2001 年 3 月
・上地聡子「敗戦直後の女性の経済活動―1950 年代初頭までを中心に―」沖縄県教育庁文化財課資料編集班（編）『沖縄県史　各論編第八巻　女性史』沖縄県教育委員会　2016 年 3 月

（第 5 章）

・又吉栄喜「ジョージが射殺した猪」『ジョージが射殺した猪　傑作短編小説集』　燦葉出版社　2019

年 6 月
・石川真生「軍服を脱いだ米兵たち」石川真生・國吉和夫・長元朝浩『これが沖縄の米軍だ　基地の島に生きる人々』高文研　1996 年 6 月
・神島三島「少女はどこに行くのか～重層する暴力の下で～」『ＥＤＧＥ』創刊号　ＡＰＯ　1996 年 2 月
・「維新・橋下氏「風俗業活用を」今月初め、沖縄で米軍司令官に」『朝日新聞』2013 年 5 月 14 日　朝刊 1 面
・東峰夫・又吉栄喜・田津美津子・小浜清志・山里禎子・崎山多美「《座談会》創作の周辺」『新沖縄文学』82 号　沖縄タイムス社　1989 年 12 月
・「弾拾いの婦人を射殺？　頭と腰を射たれて死ぬ　金武村マリン隊の演習場で」『沖縄タイムス』1959 年 12 月 27 日　朝刊 7 面
・又吉栄喜（聞き手 : 仲里効）「又吉栄喜ワールド　アメリカの影と沖縄の基層」『ＥＤＧＥ』創刊号　ＡＰＯ　1996 年 2 月
・岡本恵徳「下級兵士の眼で捉えた沖縄」『現代文学に見る沖縄の自画像』高文研　1996 年 6 月
・新城郁夫「〈レイプ〉からの問い　戦後沖縄文学のなかの戦争を読む」『沖縄文学という企て　葛藤する言語・身体・記憶』　インパクト出版会　2003 年 10 月
・新城郁夫「日本語を裏切る　又吉栄喜の小説における「日本語」の倒壊」『到来する沖縄　沖縄表象批判論』インパクト出版会　2007 年 11 月
・柳井貴士「又吉栄喜「ジョージが射殺した猪」論―占領時空間の暴力をめぐって―」『現代沖縄文学の研究――〈戦争〉表象を中心に』　早稲田大学博士論文　2016 年
・マイク・モラスキー「近年の占領文学」『新版　占領の記憶／記憶の占領―戦後沖縄・日本とアメリカ』岩波書店　2018 年 7 月
・喜納育江「ネイティブなるもの」今福龍太（編）『21 世紀 文学の創造　5　境域の文学』岩波書店 2003 年 3 月
・高嶺朝一『知られざる沖縄の米兵』高文研　1984 年 5 月
・前田哲男・林博史・我部正明（編）『〈沖縄〉基地問題を知る事典』吉川弘文館　2013 年 2 月
・「宮永英一（愛称：チビ）編」企画部平和文化振興課『沖縄市史資料集 4 ロックとコザ』沖縄市役所 1994 年 3 月
・「米軍「対ゲリラ戦」訓練で県民を徴用」『人民』1964 年 9 月 9 日　2 面
・新屋敷弥生「コザのベトナム戦争」「沖縄を知る事典」編集委員会『沖縄を深く知る事典』日外アソシエーツ　2003 年 2 月
・福地曠昭『米軍基地犯罪―いまも続く沖縄の悲しみと怒り』労働教育センター　1992 年 10 月
・月刊沖縄社（編）『アメリカの沖縄統治関係法規総覧（Ｉ）』池宮商会　1983 年 5 月
・「ブロン軍曹に無罪 猪と間違えた射殺事件」『沖縄タイムス』1960 年 2 月 20 日 朝刊 7 面
・デイヴィット・ヴァイン『米軍基地がやってきたこと』原書房　2016 年 4 月
・清水晶子・垂水千恵・中川成美（司会：飯田祐子・武内佳代）「座談会　クィア・リーディングとは何か―読む・闘う・変革する―」『昭和文学研究』第 77 集　2018 年 9 月
・宮城悦二郎『占領者の眼』那覇出版　1982 年 12 月

（第 6 章）

・目取真俊「水滴」『目取真俊短編小説選集 2　赤い椰子の葉』　影書房　2013 年 7 月
・目取真俊『沖縄「戦後」ゼロ年』日本放送出版協会　2005 年 7 月
・秋山駿「沖縄は文学に深い」、立松和平「文学の水脈」『文學界』1997 年 4 月号　文藝春秋　1997 年 4 月
・石原慎太郎「第百十七回芥川賞選評」『文藝春秋』第 75 巻第 11 号　文藝春秋　1997 年 9 月
・岡本恵徳「沖縄の小説の現在――内面化への志向」『敍説ＸＶ』花書院　1997 年 8 月
・高口智史「目取真俊・沖縄戦から照射される〈現在〉――「風音」から「水滴」へ――」『社会文学』31 号　社会文学編集委員会　2010 年 2 月
・川村湊「沖縄のゴーストバスターズ」『風を読む　水に書く――マイノリティー文学論』講談社　2000 年 5 月
・日高佳紀「解説 戦争、その〈記憶〉を語るということ」飯田祐子・日高佳紀・日比嘉高（編）『文学で考える「日本」とは何か』双文社出版　2007 年 4 月
・田口律男「目取真俊「水滴」論――文学・美学イデオロギーへの抵抗」『都市テクスト論叙説』松籟社 2006 年 2 月
・伊野波優美「目取真俊「水滴」における「グロテスク・リアリズム」――「沖縄文学」あるいは日本語の「対日本」文学――」『沖縄文化』第 117 号　『沖縄文化』編集所　2014 年 11 月
・村上陽子「循環する水――目取真俊「水滴」」『出来事の残響――原爆文学と沖縄文学』　インパクト出版会　2015 年 7 月
・大原祐治「「二者択一」の論理に抗する―目取真俊「水滴」論―」『学習院大学国語国文学会誌』第 51 号　学習院大学文学部国語国文学会　2008 年 3 月
・スーザン・ブーテレイ「「水滴」論」『目取真俊の世界――歴史・記憶・物語』影書房　2011 年 12 月
・安仁屋政昭「総論」沖縄県（編・発行）『沖縄県史　第 10 巻各論編 9　沖縄戦記録 2』1975 年 3 月
・呉世宗『沖縄と朝鮮のはざまで　朝鮮人の〈可視化／不可視化〉をめぐる歴史と語り』明石書店　2019 年 1 月
・黒沢祐人「依存とケアの水――目取真俊「水滴」における記憶の現在性の再考」『言語態』18 巻　言語態研究会　2019 年 12 月
・朱恵足「身体が戦争記憶を語る時―「水滴」における〈証言〉のポリティクス」『目取真俊の小説における沖縄と「身体」の政治学』名古屋大学大学院人間情報学研究科博士論文　2002 年
・目取真俊・宮城晴美「終わらない「集団自決」と「文学」の課題」『すばる』2007 年 2 月号　集英社 2007 年 2 月
・友田義行「目取真俊「水滴」における時間・記憶・身体」『信州大学教育学部研究論集』11 巻　信州大学教育学部　2017 年 9 月
・日韓共同「日本軍慰安所」宮古島調査団『戦場の宮古島と「慰安所」　12 のことばが刻む「女たちへ」』なんよう文庫　2009 年 9 月
・スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』岩波書店　2016 年 2 月

・平井和子「兵士と男性性――「慰安所」へ行った兵士／行かなかった兵士」上野千鶴子・蘭信三・平井和子（編）『戦争と性暴力の比較史へ向けて』岩波書店　2018 年 2 月
・ピエール・ノラ（長井伸仁　訳）「記憶と歴史のはざまに」ピエール・ノラ（編）谷川稔（監訳）『記憶の場――フランス国民意識の文化＝社会史　第 1 巻　対立』岩波書店　2002 年 11 月
・テッサ・モーリス・スズキ（田代泰子　訳）「過去は死んでいない」『過去は死なない　メディア・記憶・歴史』岩波書店　2004 年 8 月
・大越愛子「とむらいのポリティクス」『フェミニズムと国家暴力――トランスナショナルな地平を拓く』世界書院　2004 年 4 月
・尾西康充「「水滴」――地域社会における支配と言葉」『沖縄　記憶と告発の文学　目取真俊の描く支配と暴力』大月書店　2019 年 11 月
・成田龍一「戦争と記憶、1970 年前後」『日本近代文学』63 集　日本近代文学会　2000 年 10 月
・屋嘉比収『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす　記憶をいかに継承するか』世織書房　2009 年 10 月
・赤坂憲雄・玉野井麻利子・三砂ちづる「記憶の継承と語り口」『歴史と記憶――場所・身体・記憶』藤原書店　2008 年 4 月
・鵜飼哲「時効なき羞恥　戦争の記憶の精神分析に向けて」『抵抗への招待』みすず書房　1997 年 9 月

（第 7 章）

・目取真俊「群蝶の木」『目取真俊短編小説選集 3　面影と連れて』　影書房　2013 年 11 月
・新城郁夫「小説概観 2000　崩壊の予兆」『沖縄文芸年鑑 2000 年版』沖縄タイムス社　2000 年 12 月
・大野隆之「目取真俊「群蝶の木」」『沖縄文学論―大城立裕を読み直す』東洋企画　2016 年 3 月
・Davinder L.Bhomik”Postreversion fiction and Medoruma Shun” ,*Writing Okinawa Narative acts of identity and resistance,*　Routledge 2008
・Kyle Ikeda “Critical”Sentimentalism “and conscious engagement in “Tree of Butterflies “” , *Okinawan War Memory Transgenerational trauma and the war fiction of Medoruma Shun*,　Routledge 2014
・尾西康充「目取真俊「群蝶の木」論―暴力の共犯者と家父長的権威」『沖縄　記憶と告発の文学　目取真俊の描く支配と暴力』大月書店　2019 年 11 月
・宮沢剛「「慰安婦」と小説―語り得ぬ記憶の表現をめぐって―」『昭和文学研究』第 76 集　笠間書院　2018 年 3 月
・竹内勝徳・高橋勤（編）『身体と情動―アフェクトで読むアメリカン・ルネッサンス』彩流社　2016 年 3 月
・ジュディス・バトラー（本橋哲也　訳）「暴力・哀悼・政治」『生のあやうさ　哀悼と暴力の政治学』以文社　2007 年 8 月
・山川泰邦「随想　慰安隊員の動員」『琉球新報』1987 年 5 月 30 日
・洪玧伸『沖縄戦場の記憶と「慰安所」』インパクト出版会　2016 年 2 月
・川田文子『赤瓦の家―朝鮮から来た従軍慰安婦』　筑摩書房　1987 年 2 月
・新城郁夫「文学のレイプ　戦後沖縄文学における「従軍慰安婦」表象」『到来する沖縄　沖縄表象批判論』インパクト出版会　2007 年 11 月

・呉世宗『沖縄と朝鮮のはざまで　朝鮮人の〈可視化／不可視化〉をめぐる歴史と語り』明石書店　2019年1月
・日韓共同「日本軍慰安所」宮古島調査団『戦場の宮古島と「慰安所」　12のことばが刻む「女たちへ」』なんよう文庫　2009年9月
・加藤典洋「がんばれチヨジ、という場面」『この時代の生き方』講談社　1995年11月
・成田龍一「戦争と記憶、一九七〇年前後」『日本近代文学』63号　日本近代文学会　2000年10月
・朴裕河『帝国の慰安婦　植民地支配と記憶の戦い』朝日新聞出版　2014年11月
・岡野八代・清末愛砂・伊田広行・洪玧伸・菊池夏野「〈女性国際戦犯法廷〉以降の世界を考える」「女性・戦争・人権」学会学会誌編集委員会（編）『女性・戦争・人権』8号　行路社　2007年6月

（第8章）

・崎山多美「月や、あらん」『月や、あらん』なんよう文庫　2012年9月
・崎山多美「コトバの風景　〈アッパ〉と〈アンナ〉と〈オバァ〉の狭間で」、「届けられた声」『コトバの生まれる場所』　砂子屋書房　2004年2月
・崎山多美「シマコトバでカチャーシー」今福龍太（編）『21世紀　文学の創造　2　「私」の探求』　岩波書店　2002年12月
・佐藤泉「日本語圏文学の「声」と「言葉」――崎山多美氏、ぱくきょんみ氏の対話に寄せて――」『アジア太平洋研究』42巻　成蹊大学アジア太平洋センター　2017年11月
・渕上千香子「「他者」の声の表象化をめぐって「月や、あらん」」『崎山多美研究――「私」と「他者」の物語――』　広島大学博士論文　2017年3月
・朴裕河『帝国の慰安婦　植民地支配と記憶の闘い』　朝日新聞出版　2014年11月
・鄭栄桓『忘却のための「和解」――『帝国の慰安婦』と日本の責任』世織書房　2016年3月
・前田朗「「慰安婦」問題と学問の暴力――植民地主義とヘイト・スピーチ」前田朗（編著）『「慰安婦」問題の現在―「朴裕河現象」と知識人―』三一書房　2016年4月
・金富子「『帝国の慰安婦』と消去させる加害責任――日本の知識人・メディアの言語構造を中心に」中野敏男・板垣竜太・金昌祿・岡本有佳・金富子（編）『「慰安婦」問題と未来への責任――日韓「合意」に抗して』大月書店　2017年12月
・成田龍一「性暴力と日本近代歴史学――「出会い」と「出会いそこね」」上野千鶴子・蘭信三・平井和子（編）『戦争と性暴力の比較史に向けて』岩波書店　2018年2月
・四方田犬彦「より大きな俯瞰図のもとに　朴裕河を擁護する」、中川成美「国家と性　文学を通して『帝国の慰安婦』を読む」、金哲「抵抗と絶望」浅野豊美・小倉紀蔵・西成彦（編）『対話のために　「帝国の慰安婦」という問いをひらく』クレイン　2017年5月
・新城郁夫「見直される沖縄戦の語りのために」『沖縄文学という企て　葛藤する言語・身体・記憶』インパクト出版会　2003年10月
・川田文子「あとがき」『赤瓦の家―朝鮮から来た従軍慰安婦』筑摩書房　1987年2月
・アルフォンソ・リンギス（野谷啓二　訳）『何も共有していない者たちの共同体』　洛北出版　2006年2月

・細見和之・藤目ゆき・角田由紀子（志水紀代子（司会））「戦争と性暴力」「女性・戦争・人権」学会学会誌編集委員会　『女性・戦争・人権』第 2 号　行路社　1999 年 5 月
・ヴァルター・ベンヤミン（佐藤康彦　訳）「言語一般および人間の言語」ヴァルター・ベンヤミン（久野収・佐藤康彦　訳）『ヴァルター・ベンヤミン著作集　3　言語と社会』晶文社　1981 年 2 月
・崎山多美「〈べー〉を反芻する」李静和『新編　つぶやきの政治思想』岩波書店　2020 年 4 月

（第 9 章）

・目取真俊「眼の奥の森」『眼の奥の森』影書房　2009 年 5 月
・目取真俊「小さくても大切な声」『沖縄／草の声・根の意志』世織書房　2001 年 9 月
・越川芳明「森の洞窟に響け、ウチナーの声」『小説トリッパー』　2009 年冬季号　朝日新聞社　2009 年 12 月
・中川成美「支配の言葉・融和の言葉　日本語文学という概念をめぐって」郭南燕（編）『バイリンガルな日本語文学――多言語多文化のあいだ』　三元社　2013 年 6 月
・朱恵足「失われた「戦後」をたどり直す――オキナワとフクシマからの問い」坪井秀人（編）『戦後日本を読みかえる　第 6 巻　バブルと失われた 20 年』臨川書店　2018 年 6 月
・鈴木智之「輻輳する記憶――『眼の奥の森』における〈ヴィジョン〉の獲得と〈声〉の回帰」『眼の奥に突き立てられた言葉の銛――目取真俊の〈文学〉と沖縄戦の記憶』　晶文社　2013 年 3 月
・村上克尚「波及する戦争――目取真俊『眼の奥の森』を読むために」『越境広場』4 号　越境広場刊行委員会　2017 年 12 月
・米山リサ（小澤祥子・小田島勝浩　訳）「2 つの廃墟を越えて――広島、世界貿易センター、日本軍「慰安所」をめぐる記憶のポリティクス」ひろたまさき・キャロル・グラック（監修）冨山一郎（編）『記憶が語りはじめる』東京大学出版会　2006 年 12 月
・村上陽子「暴力によらない抵抗の回路を開く――目取真俊『眼の奥の森』をめぐって」『福音と世界』2019 年 9 月号　新教出版社
・ジュディス・バトラー（本荘至　訳）「非暴力、哀悼可能性、個人主義批判」『現代思想』二〇一九年三月臨時増刊号　青土社　2019 年 2 月
・マーク・カーランスキー（小林朋則　訳）『非暴力　武器を持たない闘士たち』ランダムハウス講談社　2007 年 8 月
・岡野八代「「慰安婦」問題と日本の民主化」『戦争に抗する――ケアの倫理と平和の構想』岩波書店　2015 年 10 月
・アルフォンソ・リンギス（水野友美子・金子遊・小林浩二　訳）「栄光におぼれる」『暴力と輝き』水声社　2019 年 5 月
・ジュディス・バトラー（本橋哲也　訳）「解釈と免責　私たちが聞くことのできるものとは？」『生のあやうさ　哀悼と暴力の政治学』以文社　2007 年 8 月
・ジュディス・バトラー（本橋哲也　訳）「暴力・哀悼・政治」『生のあやうさ　哀悼と暴力の政治学』以文社　2007 年 8 月
・新城郁夫「「掟の門前」に座り込む人々――非暴力抵抗における「沖縄」という回路」『沖縄に連なる

――思想と運動が出会うところ』岩波書店　2018 年 10 月